

## 1. 流域の概要

後志利別川は、その源を北海道瀬棚郡今金町の長万部岳（標高 972m）に発し、山間部を流下し、今金町住吉において平野部に出て、今金市街部でオチャラッベ川、利別目名川等を合わせ、せたな町において日本海に注ぐ、幹川流路延長 80 km、流域面積 720 km<sup>2</sup> の一級河川である。

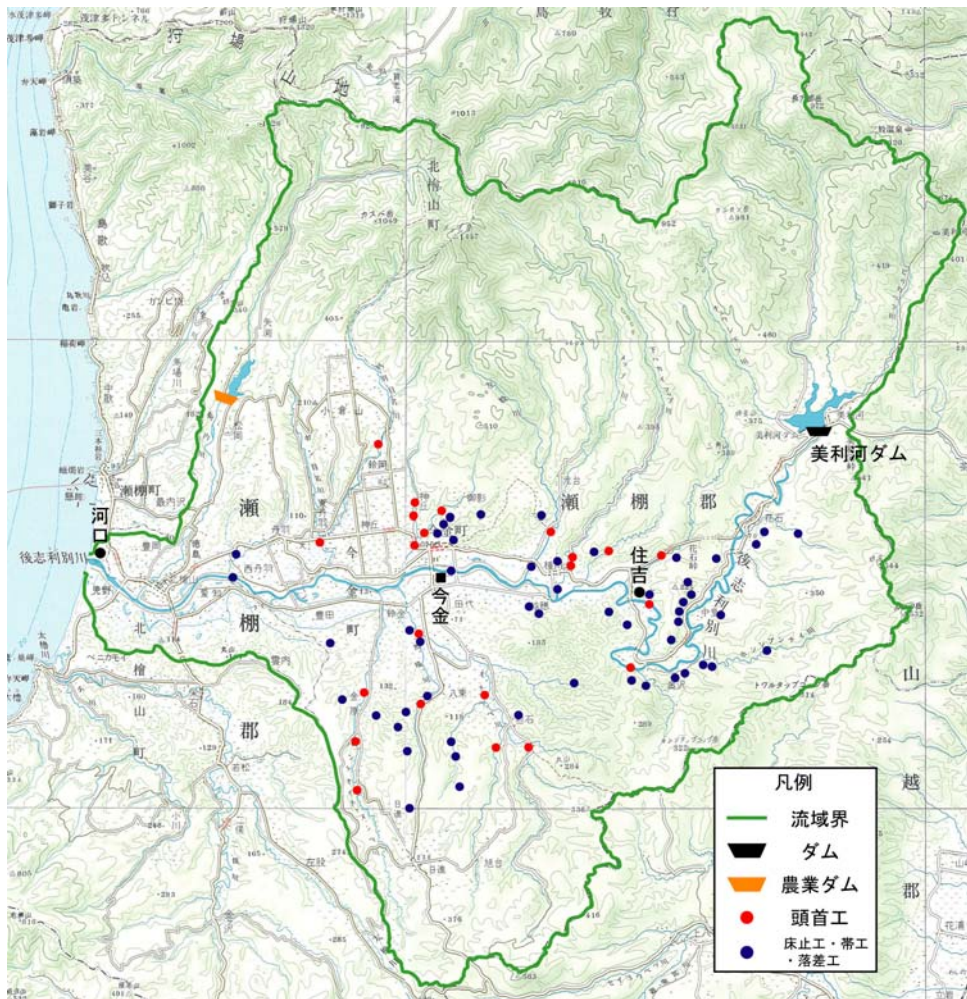
その流域は、せたな町、今金町の 2 町からなり、後志利別川に沿って広がる肥沃な土地と温暖な気候により、道南地域を代表する穀倉地帯であることなど、檜山地方における社会・経済・文化の基盤をなしている。流域の土地利用は、山林等が約 81%、水田、畑等の農地が約 14%、宅地等その他が約 5%となっている。また、河川水質が良好で、多様な自然環境を有していることから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

流域の地質は、古生層の上に海底火山の噴出物である緑色凝灰岩が含まれている新第三紀層が重なっている。また、半島部東には活火山・北海道駒ヶ岳があり、流域を含むかなりの地域が火山性土で覆われている。流域の年間降水量は今金で約 1,350mm である。

現在、後志利別川流域においては、直轄の美利河ダム、農業用の真駒内ダム、頭首工 19 基等の横断工作物があり、砂防ダム 11 基、治山ダム施設 136 基が整備済みであることから近年においては、河道に対する土砂流出は比較的少なく安定している。

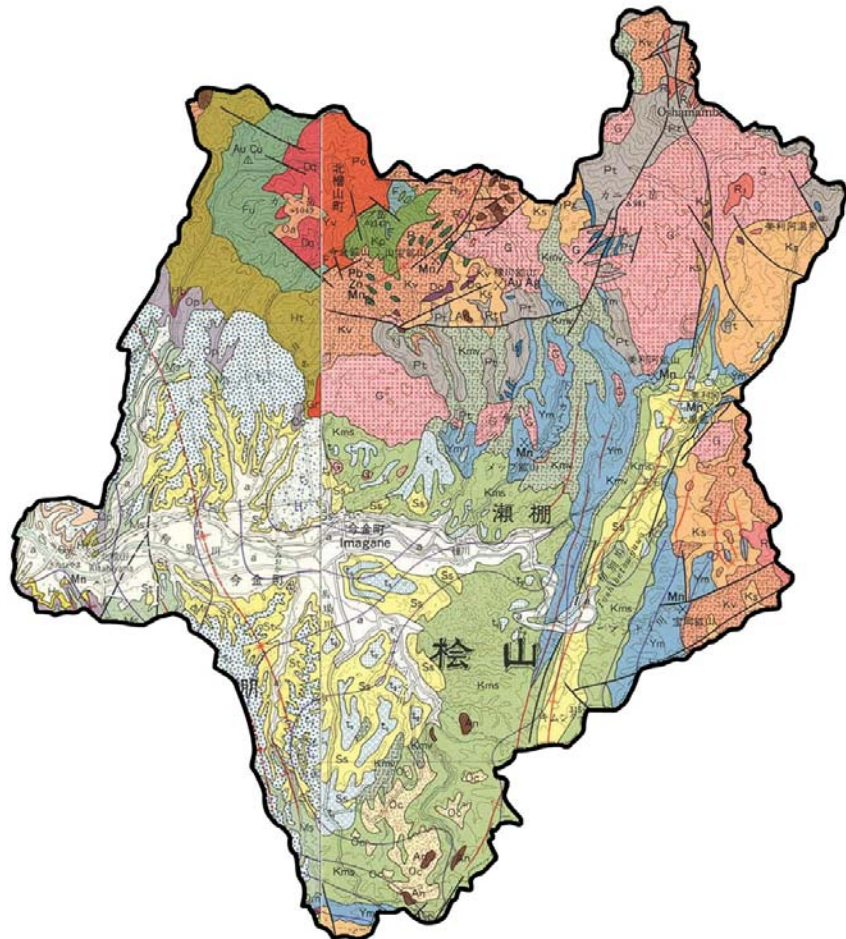
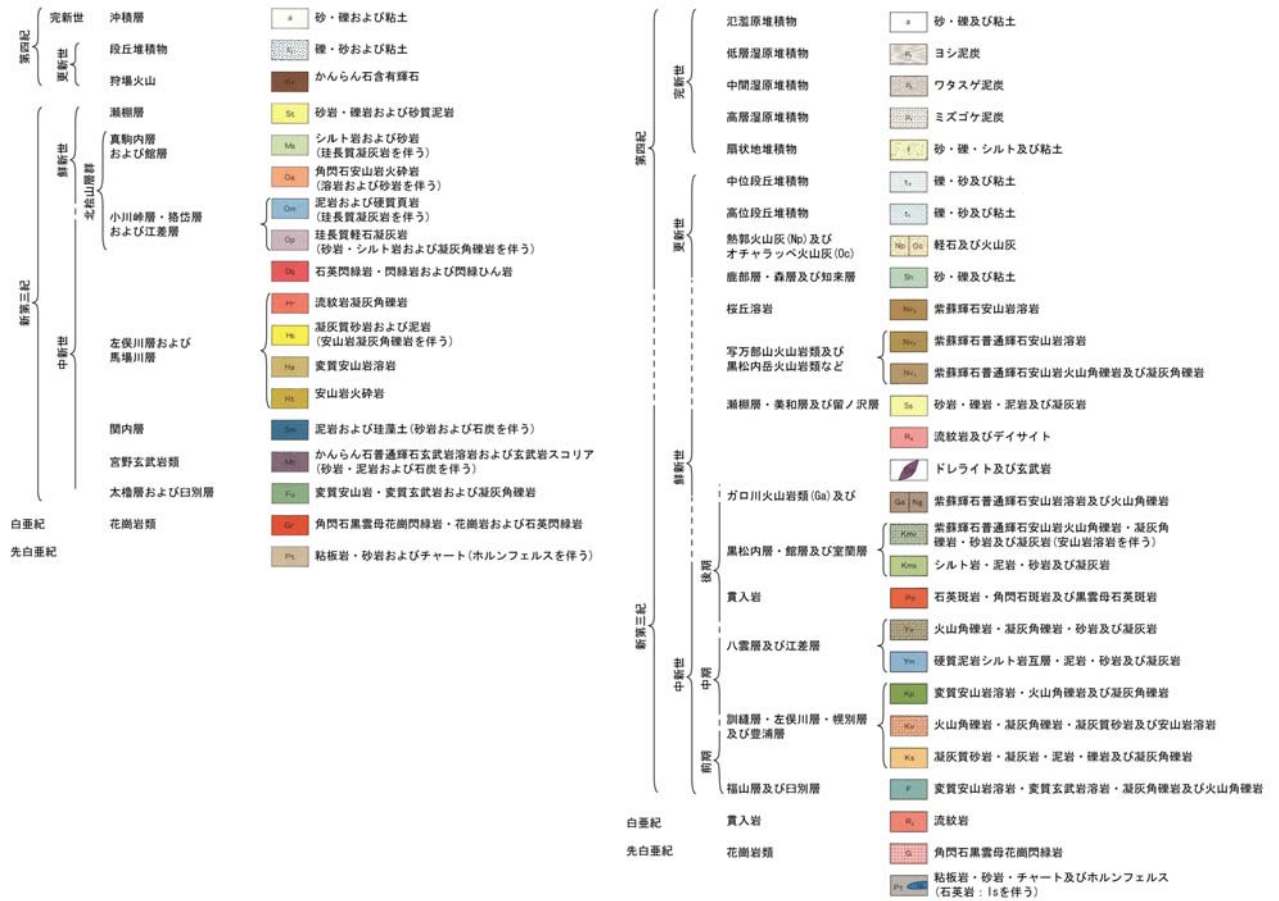
表 1-1 後志利別川流域の概要

項目	諸元
流路延長	80km
流域面積	720km <sup>2</sup>



出典: 函館開発建設部、函館土木現業所、檜山支庁、北檜山町、今金町資料を基に作成

図 1-1 後志利別川流域図



出典：産業技術総合研究所地質調査総合センター「図幅図」

図 1-2 後志利別川地質図

## 2. 河床変動の状況

### 1) 河床変動の縦断的变化

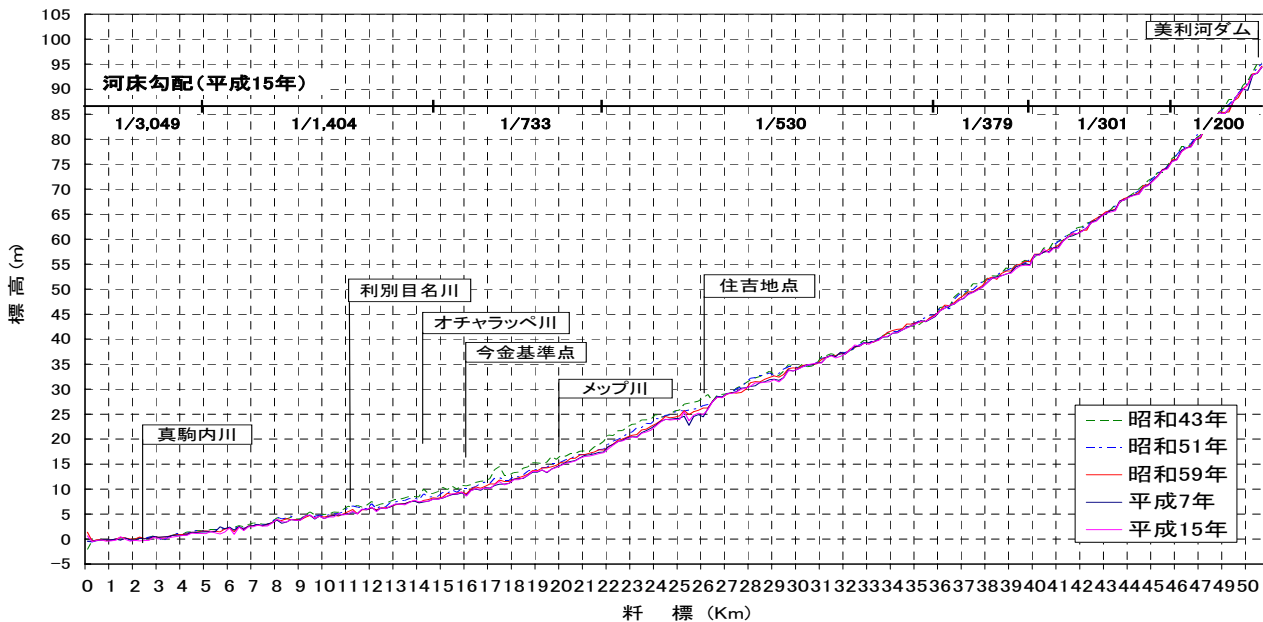


図 2-1 低水路平均河床高縦断図

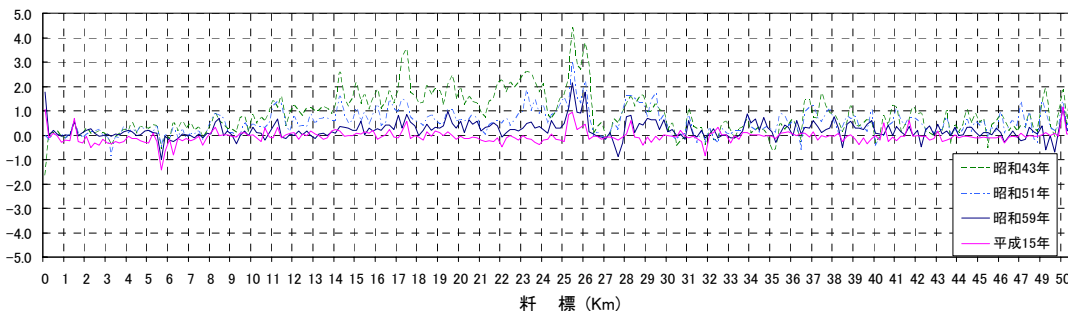


図 2-2 河床変動縦断図(平成 7 年基準)

既往 36 年間（昭和 43 年～平成 15 年）の低水路平均河床高は、縦断的及び経年的にも全川にわたって河床低下の傾向が見られる。当河川では従来より砂利採取は禁止されていることから自然の変動である。

本川における捷水路工事は昭和 9 年に着手し、昭和 58 年までに河口から住吉までの区間を主に 14 箇所で行われている。この工事により旧河道延長 17.8 km が新水路 6.9 km となり 10.9 km 短縮され現在の河道線形となっている。最後の捷水路工事は昭和 58 年に上住吉 (KP27.6～28.0)、中里 (KP36.4～36.6) の 2 箇所で行われている。この河道直線化によりこの地点の上下流で河床低下が進んだが（昭和 59 年～平成 7 年）、近年の河床は（平成 7 年～平成 15 年）安定している。



## 2) 河床変動の経年的変化

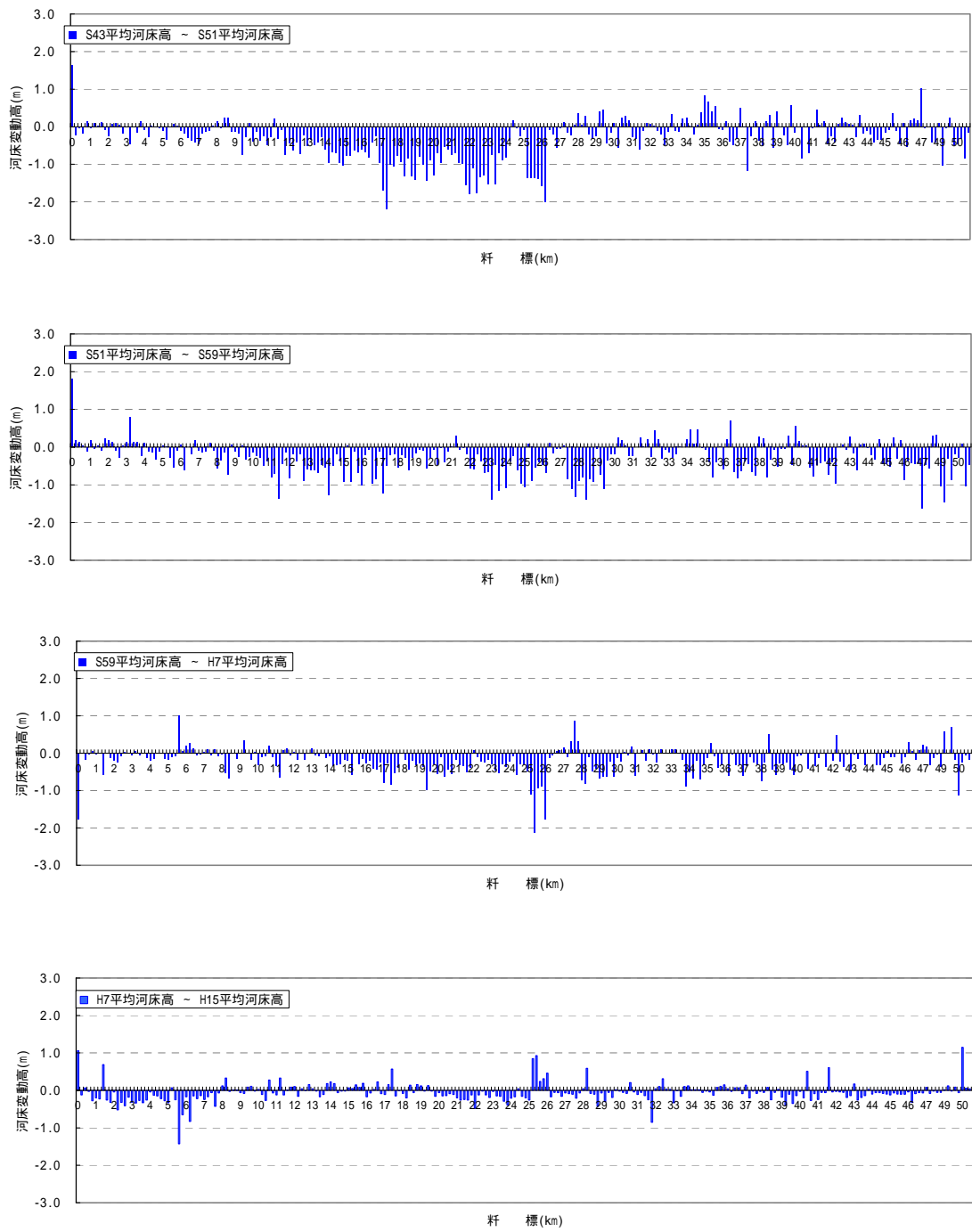


図 2-3 河床変動高経年変化図

### 3. 河口部の状況

#### 1) 河口部



図 3-1 河口部の状況（平成 13 年 8 月撮影）

河口は、右岸側では岩盤が露出しており、天然の突堤を形成している。河口砂州は波浪及び海浜流による沿岸漂砂によって形成されているが、この突堤背後で波あたりが弱くなるため河口は右岸側に固定されている。河口部左岸の高水敷は昭和 61 年から 62 年にかけて掘削が行われているが、河口部の低水路は大きな変動は見受けられない。また、河口閉塞もほとんど見受けられない。

後志利別川横断変遷図

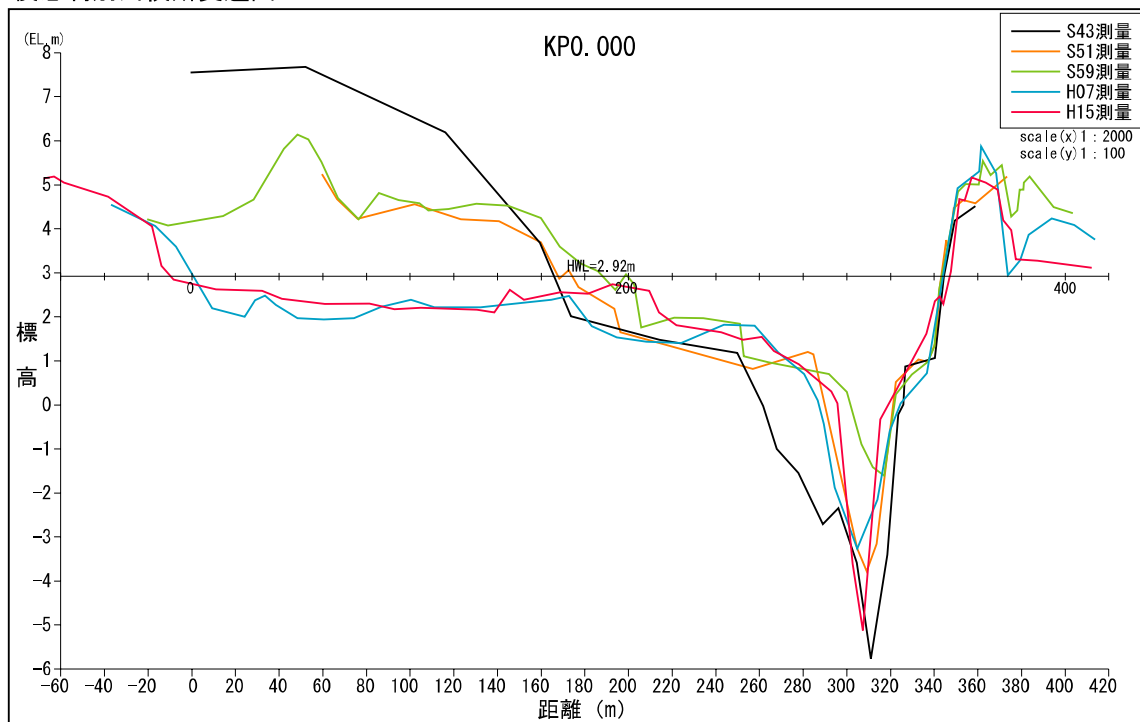


図 3-2 河口部横断変遷図

## 2) 海浜部

昭和59年の汀線に対し現在までの約20年間について、汀線の大きな変化は見受けられない。

**昭和59年撮影**(美利河ダム着工、昭和54年)



**平成8年撮影**

(美利河ダム完成 平成4年以降の状況)



**平成15年撮影**(現況)



図 3-3 海浜部状況

#### 4.まとめ

後志利別川の土砂動態については、36年間の低水路平均河床高の縦断的、時間的变化などについて検討した結果、ショートカットなど河道の直線化工事等の治水事業が行われた昭和年代において河床低下が進んだ。ただし、近年において、河床の変動は少なく安定化してきている。引き続き、河道のモニタリングを適切に実施し、今後とも水系全体の土砂バランスに配慮することとする。